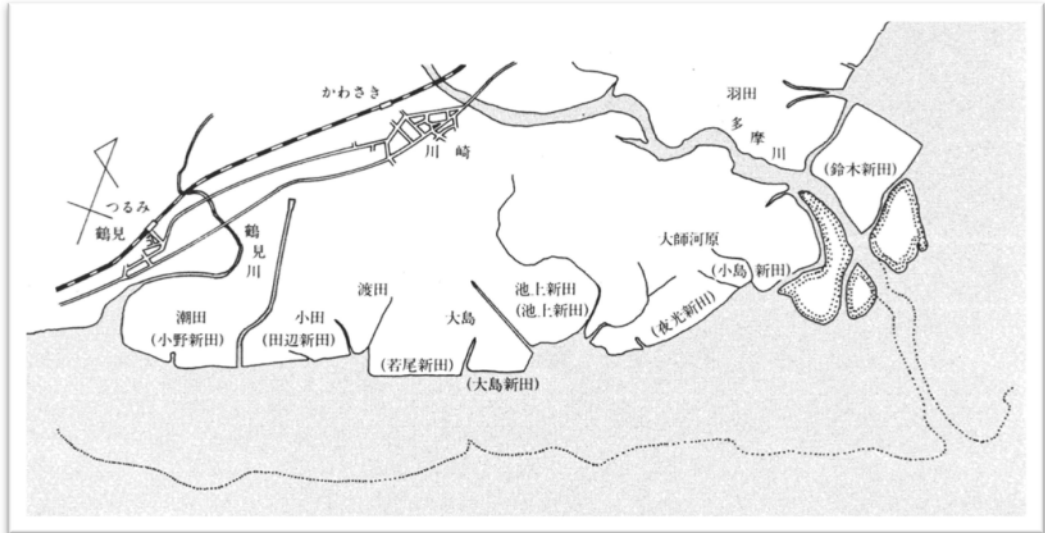


～トピックス～

<川崎港の歴史を知ろう！>

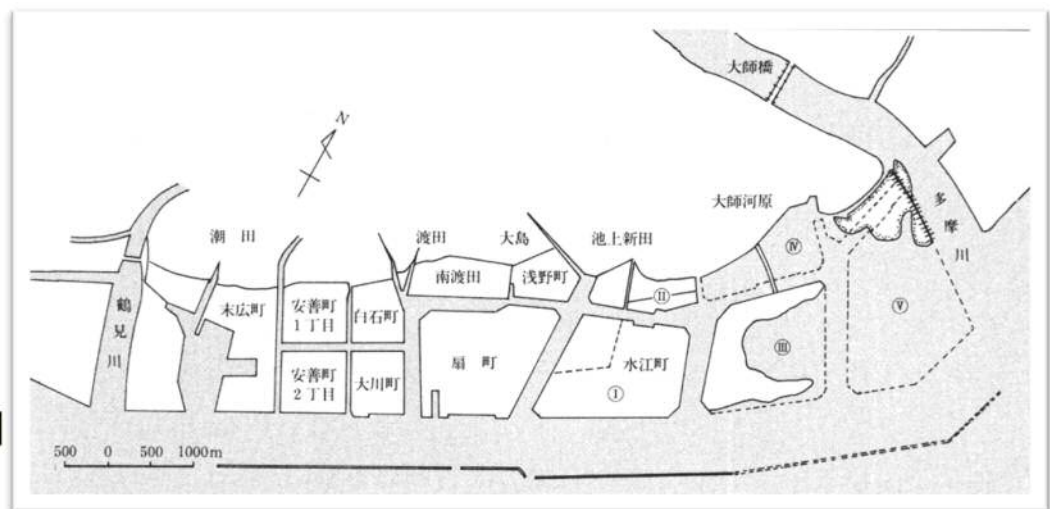
明治4年に行われた廃藩置県によって川崎付近は武蔵の国から神奈川県になりました。このころ、海岸一帯には遠浅の干潟が広がり、のり養殖と貝類の養殖場として利用されていました。明治27年に夜光新田、明治35年には小野新田、明治42年には大島新田など地先の埋立がすすみます。



新田開発図（明治末期）

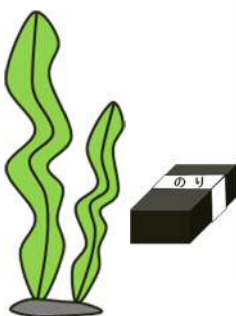
出典：川崎市「川崎港のあゆみ」（1987）

大正に入り海辺の埋立は、横浜市末広町、安善町、川崎市南渡田、白石町、大川町と広がっていきます。大師河原地先の埋立は、昭和9年4月には大師漁業協同組合及び大師町海苔採取営業者組合と漁業補償契約が結ばれた後、昭和12年には公営事業として進められましたが、昭和20年に事業は中断します。このころまでに遠浅の干潟はほとんどが埋立地となっています。



昭和20年当時の埋立状況

出典：川崎市「川崎港のあゆみ」（1987）

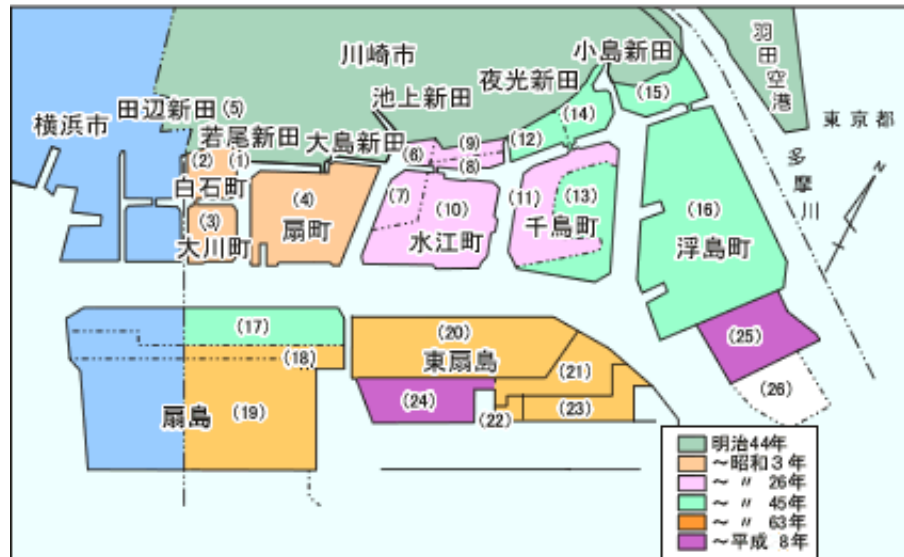


埋立地には製鉄所、石油コンビナート、発電所などの企業が進出し、京浜工業地帯の中核をなす工業港が形成されます。昭和 31 年からは浮島町と千鳥町の埋立が始まり、昭和 47 年からは東扇島の埋立が始まります。埋立地には工業地帯を担う企業の進出のほかに、市民が憩える施設の整備が進んでいます。今回の調査を行った「東扇島西公園」は平成 16 年 4 月に、「東扇島東公園」は平成 20 年 4 月にオープンしました。

以前は干潟が多かったんだね。
土地がこんなに広がっているんだ！



川崎港の埋立状況



現在の臨海部

出典：川崎港の歴史

(<http://www.city.kawasaki.jp/kurashi/category/29-6-1-15-2-0-0-0-0-0.html>)

埋立地は海の生きものたちにはどんな変化をもたらしたでしょう。工業地帯の発展のうらでは、かつての広大な干潟にすんでいたアサリやハマグリ、クルマエビやガザミなどのエビ・カニ・貝類は残された浅場以外にはすみにくくなくなりました。また、海と川を行ききするアユやウナギの稚魚が育つ干潟やヨシ原もなくなりました。そのため、このような場所を人の手で少しでも増やそうとする活動が始まっています。



人工海浜（かわさきの浜）